

担当部局

児童学専攻

評価項目 1	（ア）体系的な履修を促す科目編成となっているか （イ）開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か
参照資料	・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・単位修得要領（カリキュラムマップ） ・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック） ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）児童学専攻は教育課程編成・実施の方針に基づき、児童学に関する高度な専門性を身につけることのできる教育課程を編成している。児童発達、児童保健、児童文化の3つの領域によって構成され、各領域において特論・実習を開講し、児童の心身の発達や健康、児童の生活・文化について科学的に捉え、発達支援・子育て支援のための方法や理論、あるいは児童文化活動における表現力などを学べるようにカリキュラムを体系的に編成している。

（イ）院生は所属する研究領域の科目を中心に履修し、課題研究科目を加えた修了に必要な計30単位以上を履修することとしている。本専攻では、3領域にわたる計50科目の専門科目を設けていることから、院生が自身の関心に沿って科目選択をする上で、過不足のない科目数であると判断する。また、2021年度の開講科目の9割以上を専任教員が担当していることから、専任教員が担当する科目を中心とする、適切な科目開講状況になっている。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

担当部局

児童学専攻

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3 カ年） ・ジェネリックスキル測定テスト結果（1→3 回生の伸長・3 カ年） ・アセスメントブック ・授業アンケート結果（学位プログラムレベル・3 カ年） ・大学院アンケート ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

大学院生アンケートでは発達教育学研究科単位での結果が得られている。直近の 2021 年度のアンケート結果では、「授業内容」「授業レベル」「満足度」について高評価が得られた（いずれの項目もほぼ 100%が 5 点満点中 4 点以上で評価）。児童学専攻は児童発達・児童保健・児童文化に関する 3 分野を設け、専門的職業人や研究者の育成を目指した多様なアプローチを行っている。このことが、教育内容や授業レベルのアンケート結果に反映され、効果が得られたものと思われる。また、従来から課題であった時間割編成についても、2 年連続で満足度の評価に改善傾向が見られた。

【成果が上がっている点】

特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

特筆すべき事項なし。

評価項目 3	(ア) 成績評価、フィードバックは、シラバスに基づき、適切に実施されているか。 (イ) 成績分布に偏りは生じていないか。
参照資料	・成績分布（G P A ・得点）（科目群別・3 カ年） ・ALCS 学修行動比較調査（対象設問） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア)本専攻は、検証対象となる各年度における在籍院生数が 1～2 名と少人数である。そうした状況もあり、成績評価やフィードバックについては、各授業担当者とも丁寧に行うことができおり、いずれもシラバスに基づき、適切に実施されている。

担当部局

児童学専攻

（イ）（ア）で述べたとおり、各年度の院生数が1～2名と少ないことから、成績分布の偏りを検証することができるだけのデータがない状況である。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

評価項目 4	（ア） カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 （イ） 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・ 授業担当一覧 ・ 科目群別非常勤比率（3カ年程度） ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）本専攻では、3領域にわたる計50科目の専門科目を設けており、主要な科目も含め、そのほとんどの科目を専任教員が担当している。

（イ）現状において、非常勤講師比率は7.4%と低い値となっている。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

担当部局

児童学専攻

評価項目 5	学科・専攻等個別の FD 活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	・ FD の取り組み状況 ・ 前年度点検シート ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

児童学科においては、教員の資質向上を図る取り組みが計画的に実施されている。具体的には、全学・学部・学科 において FD 活動が推進され、学科内 FD、FD 講演会、FD 研修会、FD 交流会への積極的な参加や、授業の公開・参観等を通して教育の質向上に向けた取り組みが行われている。また、大学院教育の改善に資することを目的として、院生に対し授業や研究指導の在り方についてのアンケートが実施されている。さらに、各教員の授業担当の状況や研究業績、外部資金獲得状況の開示、授業評価などの方策が講じられている。よって、大学院に焦点化した FD は実施していないものの教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組みを行っている。

【成果が上がっている点】

特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

特筆すべき事項なし。

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	・ 教員組織編制方針 ・ 専任教員の状況 ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア)各教員の専門分野に関する研究業績や教育における指導能力等も考慮した教員組織をめざし、年齢構成の偏りの解消を念頭に組織改革を行ってきた。本専攻を担当する専任教員 11 名における年齢構成は、60 歳代 18.2%、50 歳代 63.6%、40 歳代 18.2%であり、性別構成は、男性 54.5%、女性 45.5%、職位構成は、教授 72.7%、准教授 18.2%、講師 9.1%という構成となっている。性別構成のバランスは適切であるが、年齢構成については、50 歳代以上の比率が高く、40 歳代以下の比率が非常に低いというアンバランスが生じている。

担当部局

児童学専攻

（イ）特に、教員の専門性と担当科目のマッチングを重視するとともに、設置基準との整合性や教員の男女構成比等にも配慮している。さらにカリキュラムは教育課程編成・実施の方針に基づき、児童発達、児童保健、児童文化の3つの領域によって構成され、各教員の専門分野に関する研究業績や教育における指導能力等も考慮した教員組織となっている。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

（ア）教員組織の年齢構成が50歳代以上に偏っていることから、今後、若手の教員の採用を目指す必要がある。

（イ）特筆すべき事項なし。

評価項目 7	教育活動予算において実施している活動は、その目的に対してどのような成果をあげているか。
参照資料	・教育活動予算の執行状況 ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

本専攻においては、教育活動予算において実施している活動はない。

【成果が上がっている点】

特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

特筆すべき事項なし。

担当部局

児童学専攻

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

具体的な向上・改善施策（案）について

大学院アンケートにおける成績評価及びフィードバックに関する項目の作成。大学院に焦点化した FD の実施。教員組織編成における職位や年齢、性別の適正化に向けた教員採用計画の継続的な実施。